

## 地域教材の開発と活用「歴史・地理探訪フィールドワーク」 —熊野の果てまでイッテQ！ ～入口編～—

【研究代表者】山神達也（和歌山大学教育学部）

【共同研究者】海津一朗（和歌山大学教育学部）・山口康平（附属中学校）・川嶋里枝（附属中学校）

【活動の概要】和歌山大学教育学部附属中学校社会科では、本学の海津ゼミ（日本史）と共同でフィールドワークを実施してきた。平成29年度から山神（地理学）が加わり、歴史的観点に加えて地理的観点からも地域を体験・観察している。フィールドワークは、社会科を専門として教員を目指す学生が中心となり、下見を行ったのちに作成した地域教材をもとに、附属中の生徒を案内する形で実施している。本年度は海南駅から藤代神社を経て藤代塔下王子跡・地蔵峰寺に至るルートでのフィールドワークを計画していたが、コロナ禍の影響でフィールドワークの実施が困難であったため、本報告では、当該ルートでの地域教材作成までの経過を整理したのち、昨年度までの成果も踏まえて、地域教材作成における課題を整理した。

### 1. はじめに

平成29年度後期から海津（日本史）と山神（地理学）の2名が担当する中等教育エキスパート科目「社会科地理歴史分野学習内容構成論」（学習内容構成論）が開講した。当初は別個に教科書分析を行うことを想定していたが、共同担当する以上は一緒に何かしようということになった。そこで、海津ゼミが和歌山大学教育学部附属中学校の山口と共同で企画・実施してきた「社会科歴史探訪フィールドワーク」に山神が新たに参加して、地理的観点からの学習活動も加えることになった。このフィールドワークは、昨年までで15回の回数を重ねてきた。

本共同研究事業の活動は、教育学部の学生が地域学習を深めて地域教材を作成し、その成果をもとに附属中の生徒とともにフィールドワークを実施し、学生がその案内役を務めるというものである。かかる活動の第1の目的は、学生・中学生ともに、現場を見学・体感して学びを深めることの楽しさやその重要性を知ることにある。そして第2の目的は、教材研究の重要性やその成果を児童生徒の学びにつなげることの難しさを教育学部の学生に実感してもらうことにある。本共同研究事業を通して教育学部の学生が学びを深めていくが、それは中学生の案内役を務めることで得る部分が多い。こうした活動を実践できるのは、共同研究者の山口と川嶋の協力に負うところが大きい。

本年度は、海南駅から藤代神社を経て藤代塔下王子跡・地蔵峰寺に至るルートでのフィールドワークを計画し、「熊野の果てまでイッテQ！ ～入口編～」のタイトルで地域教材を作成したが、コロナ禍の影響でフィールドワークの実施が困難であったため、本報告では、この教材作成までの経過、および近年のフィールドワークの状況を踏まえ、本共同研究事業の課題を整理する。表1に、近年における本共同研究事業の概要を示した。

表1 近年の本共同研究事業で実施したフィールドワークの概要

年度	地域教材のタイトルとフィールドワークのルート	フィールドワーク 実施日
平成29年度	秀吉の太田城水攻め&花山めぐり 日前宮～秋月～花山～音浦分水工～出水堤防～大門川～太田～太田城址	2018年1月20日(土)
平成30年度	二里ヶ浜の秘密を探れ!!! 西ノ庄駅～河西緩衝緑地公園～磯ノ浦～磯浦八幡神社～射箭頭八幡神社	2019年1月26日(土)
令和元年度	貴志川線に乗っていこう！ 伊太祁曽神社と奥の院 伊太祈曽駅～伊太祁曽神社～平緒王子跡～四季の郷公園～伝法院・丹生神社	2019年12月15日(日)
令和2年度	熊野の果てまでイッテQ！ ～入口編～ 海南駅～一の鳥居・祓戸王子跡～藤代神社～藤代坂～藤代塔下跡・地蔵峰寺	

## 2. 地域教材「熊野の果てまでイッテQ！ ～入口編～」の作成の経過

本年度は、海南市の藤代神社周辺でフィールドワークを行うことを計画した。フィールドの選定では、当初、伊太祈曽駅から海南市までのルートを考えていた。昨年度に実施した伊太祈曽神社周辺でのフィールドワークで熊野古道を歩いたことからその続きを歩くこと、当該ルートの亀の川流域に条里地割が残ることなどが理由であった。しかし、道中にトイレや昼食をとるのに適した場所がないこと、歩道のない道が続くことなどから伊太祈曽駅からのルートは断念し、海南駅を出発地として、藤代神社周辺の熊野古道を歩くこととした。具体的には、海南駅を出発して熊野街道を南下し、一の鳥居跡・祓戸王子跡、鈴木家屋敷跡、藤代神社を経由して藤代坂を上り、藤代塔下王子跡・地蔵峰寺に至るというものである（図1）。

フィールドの選定後、学習内容構成論の授業において、新旧地形図の読解、空中写真の実体視、地名辞典をはじめとする地域資料の読解を実施した。10月24日（土）には現地の下見を実施し、フィールドワークでの学習内容を検討した。その後、学生は案内する内容の担当を割り振り、各担当の学習内容に関するワークシートの作成に取り掛かった。12月4日（金）の授業には附属中学校から山口が参加し、ワークシートの構成や内容について助言した。その後、担当者間での内容の調整も含めたワークシートのブラッシュアップを継続して、地域教材「熊野の果てまでイッテQ！ ～入口編～」を完成させた。以下の①～⑧が、各案内地点の概要である。

- ①海南駅：駅の立地地点の歴史、駅前再開発、津波浸水の石碑、万葉歌碑
- ②熊野古道：熊野古道とは？ 熊野古道の歴史、熊野古道と熊野街道との違い
- ③一の鳥居跡・祓戸王子跡：一の鳥居とは何か？ 祓戸王子とは？ 八十八箇所巡りとは？
- ④鈴木家屋敷跡：鈴木氏の始まり、名字・鈴木が多い理由、鈴木一族と源義経、鈴木家屋敷の再生
- ⑤藤代神社：藤代神社の歴史、五体王子、神社になぜ仏像があるの？（藤代王子権現本堂）
- ⑥藤代坂：悲劇の皇子・有馬皇子、丁石地藏、筆捨松と硯石
- ⑦藤代塔下王子跡・地蔵峰寺：藤代峠石造宝篋印塔、峠のお地藏様、藤代塔下王子跡、御所の芝
- ⑧地形図の活用：各所。ハザードマップ、海拔を示すプレート、避難のあり方、防災備蓄倉庫

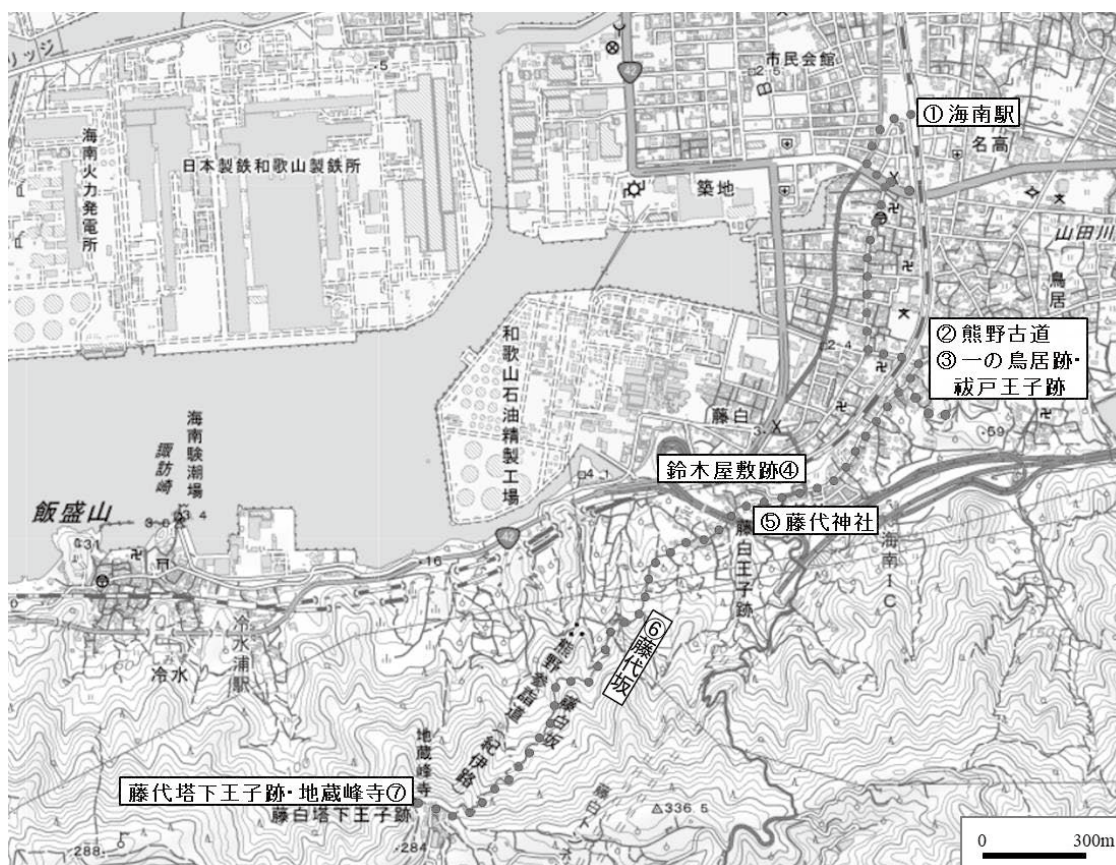


図1 計画していたフィールドワークの経路

○囲みの数字は案内地点であり、⑧地形図の活用は示していない。地理院地図をもとに作成。



### 3. 地域教材作成における課題—昨年度までの成果も踏まえて—

これまでフィールドワークを実施してきた12月は、新型コロナの感染者数の急増期にあたり、フィールドワークの実施が困難な状況にあった。そこで、昨年度までの本共同研究事業の成果も踏まえつつ、学生とともに地域教材を作成していく上で課題となったことを整理したい。

まず、地域教材の作成において、地形図の活用ができていない点が挙げられる。地形図を持って周囲の景観を観察し、現在地を周辺環境の中で把握するという活動を繰り返すことを通して、空間認識や地図認識を高めることができる。具体的には、まず出発点において、フィールドワークで歩く場所の全体像を把握する活動が重要であろう。図1を見れば、海南市の市街地が海南駅を中心に広がること、海南駅の西と東で街路網が異なること、黒江湾の埋立地に大規模な工場があること、南側の山麓に高速道路が通ることなどが理解できる。そして、今回の経路を見れば、海南駅から南に行けば藤代神社に至ること、藤代坂では傾斜のきつい山道を登ることなどを理解できる。地形図でこうした状況を把握してから歩き始めれば、景観を観察する上での一つの導き糸になろう。その後、実際に歩き始めたさい、地点①～②で交番や郵便局があることなど、地形図と具体的な地物とを対応させながら歩くことで、空間認識や地図認識を高めることができる。こうした活動を繰り返すことで、地形図を見て現地の景観を想像する、すなわち地形図の読図能力を高めることができるであろう。これはフィールドに出なければ実施できない活動であり、どこでどのような活動を行えば地形図の読図能力を高めることができるのか、知見を蓄積していくことが必要である。

続けて地形図の活用という点で、新旧地形図の比較が不十分であった。地域教材作成のさい、はじめに新旧地形図と現在の空中写真を配布してその読み取りを行ったが、フィールドの理解を深めていくうえで有効に活用できていないのである。旧版地形図は、地形図が作成された当時の地域の様子を示すとともに、その後作成された地形図と比較することで、地域が変化していく様子を読み取ることができる。例えば、1910年（明治43）の地形図を見れば（図2）、埋立地は湾奥の小規模なものに限定されること、海南駅の立地する場所など低地の多くは水田であったこと、湾奥の海岸沿いに带状に市街地が連なるとともに、集落の多くが内陸や山麓に立地することなどが読み取れる。旧版地形図（図2）と現在の地形図（図3）を比較すれば、時代とともに地域が変化していく様子を理解できる。こうした活動は教室での事前学習が有効な面があるものの、フィールドでどう説明するか、工夫の余地がある。なお、埼玉大学教育学部の谷謙二教授による「今昔マップ on the web」(<http://ktgis.net/kjmapw/>)では、新旧地形図が並べて表示される。教室での授業やフィールドワークをはじめとする様々な場面で、「今昔マップ on the web」はたいへん便利なものである。

以上のように、今回の地域教材作成で地形図の活用は不十分なものであったが、津波からの避難行動を考えるという場面を設定して、ハザードマップとの比較や各地点の海拔の確認を中心として、地形図の活用が図られていた。新しい学習指導要領では、自然災害と防災への取り組みについての比重が増しており、筆者が本フィールドワークに参加して以降、必ず取り上げている。図4は地理院地図を用いて標高を色分けしたものであり、濃い灰色が海拔5m未満を示し、そのなかに海南駅をはじめとする海南市中心部が含まれるとともに、津波被害の大きい地域とされている。海南駅前で津波浸水の記念碑を確認したのち、図4を踏まえて地形図で海拔を確認する作業と電柱などにプレートで表示された各地点の海拔を確認するという作業を行うことは、津波被害や避難行動を考えるうえで重要な経験となる。そうした点でよい教材ができたと考えるが、旧版地形図を用いた説明があれば、さらに優れた教材となったであろう。旧版地形図を見れば、かつては現在の海南駅のすぐ西に海岸線があり、海南駅周辺が津波被害を受けやすいことなどがさらに理解しやすくなるからである。

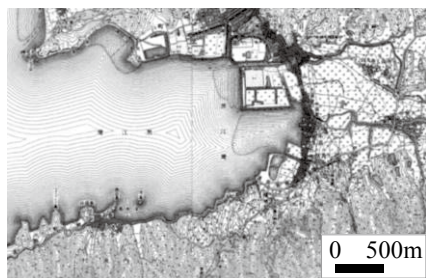


図2 旧版地形図（明治43年）  
「今昔マップ on the web」より引用。



図3 現在の地形図  
「今昔マップ on the web」より引用。



図4 色分け標高図  
濃い灰色が5m未満。地理院地図で作成。

次に、地域資料の探索に関わる問題が課題として挙げられる。昨年までのフィールドは、和歌山駅東側の太田城址、旧住友金属による埋立地が続いた二里ヶ浜、伊太祁曽神社とその北側に広がる盆地と、著名な観光スポットが数か所あることを除けば、多くの人が訪れるような場所ではなかった。このことから、学生は、地域情報の入手でたいへんな苦労を伴うことになった。結果として、新旧地形図の慎重な読図に加え、『角川日本地名大辞典』の読み込み、『紀伊名所図会』や『紀伊続風土記』の参照などを出発点として、学内外の図書館や博物館での情報収集など、幅広く情報源にあたることになった。加えて、現地を何度も訪問してネタを探す学生も多く、教員を目指す教育学部の学生として、貴重な体験であったといえよう。

一方、本年度のフィールドである藤代神社周辺は有名な観光地であり、インターネット上を含め多くの情報を得やすい地域であることから、学生は、インターネット上での情報収集とその整理が中心となり、現地に何度も赴いてネタ探しや確認作業を行うことがなかった。また、『紀伊名所図会』や地名辞典などの読み込みが不足するとともに、学外の図書館や博物館を訪問する学生も少なかった。とりわけ、地蔵峰寺の石造地蔵菩薩坐像は重要文化財であり、そのレプリカが和歌山県立博物館にあるという情報を提供したにもかかわらず、県立博物館でそのレプリカを確認した学生がほとんどいなかったのは残念である。また、インターネット上の情報をそのまま引用する事例があり、複数の情報を照らし合わせて検討することができていない学生がみられた。インターネット上でも有益な情報を得られるが、収集した種々の情報を比較検討することの重要性を理解できていないのである。このように、有名な観光地をフィールドとしたことで、地域資料の探索が不十分なものになりやすいこと、複数の資料を比較検討する意識に欠けていることなどの課題が浮かび上がるようになった。どのようなフィールドを対象とする場合でも、地域教材を作成するさいには、幅広く資料収集を行うこと、収集した資料の比較検討を慎重に行うこと、現地での観察の機会をより多く設けることが、今後の課題である。

また、これまでの学生にも共通することとして、各自が自分の担当に集中してしまい、フィールドの全体像を把握するという点で問題が残った。例えば、平成29年度の「秀吉の太田城水攻め&花山めぐり」では、鳴神貝塚のある場所から先史時代の海岸線が推測され、その後に陸地化した和歌山平野での集落や農業のあり方、そして太田城水攻めへと、種々の歴史的な出来事がつながりを持って理解できるものであった。今回のフィールドも、熊野古道を軸として捉えると理解しやすいものであった。大阪から始まる熊野古道沿いで初めて海を目近にみる地点に一の鳥居があったことや藤代神社を過ぎると急峻な山道が続くことなどを踏まえれば、学生たちが名付けた地域教材のタイトル「熊野の果てまでイッテQ！ ～入口編～」が、実は優れたネーミングであることが理解できるのである。また、海南市の平野部での熊野古道は海拔10mにほぼ沿うものであることから、古代の主要道がどういうところを通るのか、それがその後の地形変化を踏まえて災害とどう関わるのかなどを考える材料となっていたが、その点に気づいた学生も少なかった。

このように、藤代神社が熊野古道で重要な位置を占めることや一の鳥居があったことなど、個別の内容は知識として知ってはいたものの、それらのつながりを考えて藤代神社周辺地域の全体像を把握しようという意識が弱かった点は否めない。結果として、完成した地域教材も個別地点の案内・解説にとどまり、藤代神社周辺がどのような歴史を持つ地域であるのかが明らかになるものとはならなかった。これは学生の日常的な学習にも通じることであり、「一問一答式の知識」を役に立つものと考え、それらを暗記することこそが学習であると考えているように見える。「一問一答式の知識」を蓄積していくことも学習の過程では不可欠であるが、その蓄積した知識を基盤として、各種の情報を種々に組み立てていくことこそが重要である。こうした点からも、様々なものが脈絡なく点在するように見えるフィールドからつながりのある全体像を導き出そうとする地域教材の作成は、十分な成果を得るには至っていないものの、共同研究事業として有意義なものといえる。

本年度はコロナ禍の影響を受け、地域教材の作成についての課題の整理となったが、フィールドワークを実践したうえでの成果や課題は昨年度までの報告書で整理しているので、それらを参照されたい。次年度はコロナ禍が収束して各種活動に支障がない状態になっていることを願う。そして、本共同研究事業の第1の目的である、現場を見学・体感して学びを深めることの楽しさやその重要性を知ることができるようなフィールドワークを実践したい。そのためにも、地域教材の作成とその活用としてのフィールドワークの質をさらに高いものにできるよう努めていきたい。